

英訳課題

○下記の和文を英語に訳すこと。（様式自由。PC 作成可。）

日本美術の歴史を海外との交流という視点から語るとき、それぞれの時代は、モデルとした異国の美術を比較的ストレートに受け入れた時代と、それを独自の感性により積極的に変えてゆく時代の二つに大きく分けることができる。つまり日本美術は寄せて引く波のような外来文化のうねりを受けとめてきたと言えるのだが、とくに「鎖国」のレッテルを貼られた江戸時代は国際社会から孤立した印象があり、後者の時代にあたるイメージが強いであろう。しかし当時、海外からモノだけでなく文化人と芸術家が実際に来て、彼らが丸ごと持ち込んだ最新の美術が「社会現象」になっていたことをご存じであろうか？

そのリーダー的な存在は、日本に黄檗宗の教えを広めた高僧・隠元隆琦である。隠元はインゲン豆や木魚を伝えたことで有名であるが、この宗派の僧たちがもたらした文化のニュー・ウェーブは日本でとても大きな反響を呼んでいた。その最も分かりやすい例は、隠元が宇治（京都）に開いた黄檗宗の大本山である萬福寺。彼が故郷の福州（福建省）にある名刹にちなんで命名したお寺のお堂と境内の配置は、中国の建築様式をモデルにしている。いま私がお参りしても、まるで中国の寺院にいると錯覚してしまうほどで、いったい萬福寺を初めて訪れた江戸時代の人びとはどれほど驚いたことだろう。

美術の分野で、とくに本展に出陳される絵の作者で言えば、長崎で活躍した河村若芝の異様な存在感のある執拗な表現は、中国の最新スタイルを伝えて「唐絵の開祖」と呼ばれた逸然性融の奇怪でアクの強い描写を受け継いでいる。また喜多長兵衛は、来日した中国人画家・楊道真が得意とした西洋絵画に由来する陰影法を吸収しており、その技法は「隠元倚騎獅像」のうち隠元のリアルな肌のくま取りに生かされている。

これら日本の画家が中国人から直接に学んだ最新のスタイルは、長崎だけでなく、まさに日本の美術界全体に大きなインパクトを与えた「新しい風」だった。このように江戸時代の日本は、美の世界で中国と深く交流していたのである。